

平成28年度 幼児教育学科

自己点検・評価報告書

平成 29 年 3 月
富山短期大学 幼児教育学科

目 次

	ページ
概 要	1
指針Ⅰ 教育	
1. 教 務	4
2. 保育実習・教育実習	10
① 保育実習Ⅰ－1	10
② 保育実習Ⅰ－2	11
③ 保育実習指導Ⅰ	12
④ 保育実習Ⅱ・保育実習指導Ⅱ	13
⑤ 保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲ	14
⑥ 教育実習Ⅰ	15
⑦ 教育実習Ⅱ	16
⑧ 教育実習指導	18
⑨ 富山県保育実習連絡協議会	19
⑩ 自主実習	20
3. 総合演習	21
4. 保育・教職実践演習	22
指針Ⅱ 学生支援	
1. 学生指導	23
2. 進路支援	24
指針Ⅲ 地域貢献	
1. ボランティア・地域活動	26
2. 幼児教育センター活動	28

概 要

担当 [学科長 赤川]

1. 平成 28 年度自己点検・評価項目およびメンバー

自己点検・評価項目	メンバー
I 教育	
1 教務	
2 保育実習・教育実習	赤川 雅和 宮田 徹 石動 瑞代
3 総合演習	望月 健一 高木 三郎 中山 里美
4 保育・教職実践演習	大森 宏一 難波 純子 山川 賀世子
II 学生支援	梅本 恵
1 学生指導	
2 進路支援	
III 地域貢献	
1 ボランティア・地域活動	
2 幼児教育センター活動	
3 研究・社会的活動・所属団体研修等	
IV 入学者確保	
1 学生募集・入学試験	
2 広報活動	
V マネージメント体制	
1 予算	

2. 平成 28 年度自己点検・評価の概要

本学科では平成 12 年度から毎年、活動全般について、学科教員全員による自己点検・評価を実施している。本報告書は、それぞれの項目について科内分掌上の担当者を中心に整理した実績と問題点を科内会議で協議し、現状を総括するとともに、次年度に向けての課題とさらなる改善・向上のための行動について検討した結果を取りまとめたものである。

平成 27 年度からは、アクション・プランの点検を踏まえ、その項立てに基づいて報告することとしている。

その概要は、次に示すとおりである。

I 教育

(1) 教務

平成 28 年度は、全学的には、国の大学教育再生加速プログラム（AP）に採択を受けて 3 年目に入り、平成 24 年度からの教育改革の動きが一段と本格化した年であった。本学科においても、Web シラバスを活用した「授業アンケート」を本格的にスタートさせ、「授業改善レポート」や「授業改善事例集」の作成に取り組む体制が完成した。また、卒業生アンケートや第 3 者アンケートも実施された。今後も、Web シラバスの総合的な

活用や、諸アンケートの有効な活用について教員間の理解を深め、学修成果の向上につながるように授業内容・方法の改善を図っていく必要がある。

パソコンやプロジェクター、スクリーン兼用のホワイトボードの購入などを通して、「総合演習」、グループ学習、展示発表などのための学習環境整備を図った。平成 27 年度に整備されたプレゼンテーションスタジオは、「遊びの広場」や「オペレッタ」あるいは、「児童社会」の壁新聞展示など学修成果の発表の場として有効であった。今後も、ハード・ソフト両面での環境向上に一層の努力が必要である。

富山県による「保育士養成施設指導調査」が行われた。口頭による指導が 2, 3 あったが、文書による、特段の指示はなかった。

(2) 保育実習・教育実習

実習指導科目（保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱ・Ⅲ、教育実習Ⅰ、教育実習Ⅱ）間の授業内容調整と担当者の協働により、事前・事後指導の充実を図った。今後も、科目間の有機的連携が重要課題である。また、実習記録の書き方については、書式を検討することも含めて指導する必要がある。個別的な配慮が求められる実習学生については、実習先との連絡調整や学内の情報共有・連携の一層の充実・強化が必要である。なお、幼保連携型認定こども園の増加に伴い、教育実習先の確保が難しくなりつつある。実習に適格な園の見極めや配置先を早期に確保することが求められる。

(3) 保育・教職実践演習

従来からの課題であった保育実践力向上につながる内容を「遊びの広場」実践活動として展開することができた。時期及び実施方法のさらなる工夫・改善が必要である。

また、講義内容のまとめや演習課題の討議・発表を通して、4つの資質能力の理解は図られているものの、全体として「自己課題の発見」へのつながりは不十分である。

Ⅱ 学生支援

(1) 学生指導

学業不振の学生、健康面や心の問題を抱えている学生について定期科内会議において情報を共有しているが、今後さらにそのような学生に対しては、科内職員及び保健室やカウンセラーなどと連携して指導に当たる必要がある。

多様な学生たちが入学している。進路変更による退学者が例年よりやや多かった（在籍者の約 1.5%）。早期の個別指導や保護者懇談が必要である。

(2) 進路支援

平成 28 年度卒業生（106 名）の就職決定率は 100%（就職希望者 103 名）、専門職就職率は 95%（98 名）であった。保育士資格取得者 103 名、幼稚園教諭免許取得者 103 名、と専門資格を取得しないで卒業する学生も例年よりやや多かった。入学当初の意思を持続させる個別的な励ましやサポートが必要である。

保育者確保のため、求人早期化など、年々、保育所・幼稚園の求人活動が活発になってきている。このため、学生の受験先も分散化している。求人情報のすみやかな徹底

など進路指導の充実と関係機関との情報交換、連携の強化が必要である。公務員（市町村保育士）採用試験には 19 名が合格した。筆記試験（教養・専門）や作文・面接試験対策の充実・強化を図るとともに、学習意欲や習慣を持たせる環境や集団づくりの工夫が必要である。

Ⅲ 地域貢献

（１）ボランティア・地域活動

学生が意欲的に参加した活動は「幼児と保護者・小学生・障害者」と触れ合う企画が中心であった。学科での学びを活かしたり、確認できたりすることが参加意欲につながっている。

また、イベント参加や遊びの広場など、地域に働きかける自主活動を「授業」の一環として取り組むことが、地域活動へと発展させるきっかけとなっており、今後もこの方向を推進したい。

（２）幼児教育センター活動

県内外の幼稚園・保育所等の関係者と保育者養成校の教員、学生が一堂に会し、研究と実践を交流・推進する場として、第 44 回幼児教育研究会を「新しい時代の“保育の質”を考える」を研究主題として開催した。

平成 29 年度は幼児教育学科創設 50 周年を迎え、幼児教育研究会はこれを記念する大会となる。地域と密接につながった研究や社会貢献の取組をより充実させることが求められる。

1. 現状

(1) 平成 28 年度の課題への取り組みについて

① 3つのポリシーの見直し

文部科学省の AP 事業テーマⅡ「学習成果の可視化」への採択を受けて、教育課程委員会において全学的なディプロマ・ポリシー見直しを行った。本学科では、科内会議において学科のカリキュラム・ポリシーについて再度検討し、各項目の解説文を、ポイントを絞ったわかりやすくシンプルな表現に改めた。

② Web シラバスを活用した授業改善への取り組み

全学的に Web シラバスが導入されて 3 年目にはいるが、今年度は「授業アンケート」の結果を踏まえて教員が作成する「授業改善レポート」の書式が整備された。さらには、FD・SD 研修会において全学科の授業改善事例報告が行われ、これに基き、「授業改善事例集」が作成された。

本学科では、「科目協働による実践力向上への取り組み」（運動会、子どものための音楽会）、「学生を主体とする課外活動の取り組み」（遊びの広場での親子活動）、「実習の振り返り」（ロールプレイング発表）、「授業改善の内容・方法等に関する事例報告」（「保育内容（言葉Ⅱ）」）を柱に報告書を取りまとめた。

③ 共同作業やグループ討議等により授業の実践

昨年度の科内会議において、学科全体でアクティブ・ラーニングの実践に取り組むことを申し合わせた。今年度は、その実施状況の可視化を図るために、「保育内容（言葉Ⅱ）」、「国語表現Ⅱ」、「保育・教職実践演習」、「音楽Ⅱ-2（オペレッタ）」における実践の報告を「授業改善事例集」に掲載した。

④ 地域課題の理解や解決に向けた取り組み

今年度は、「総合演習」の約半数のゼミにおいて地域をテーマとする研究の指導を行った。富山の認定こども園、富山の幼稚園における英語教育、富山の保育の先人、富山の保育所における黒板使用の実態、富山の民話等がテーマとして取り上げられた。

この他、「ALL 富山 COC+教育プログラム開発委員会」より「未来の地域リーダー」の育成に向けた規則等の制定に関する検討の依頼を受け、各学科で検討を行った。本学科では、以下の 8 科目 12 単位より 8 単位以上単位を取得した学生に「未来の地域リーダー」の称号を与えることで科内の合意が得られた。

地域志向科目群：「現代社会と人間」

地域課題解決科目群：「相談援助」「保育相談支援」「保育・教職実践演習」「総合演習」

地域関連科目群：「児童家庭福祉」「児童社会」「幼児理解と教育相談Ⅱ」

⑤ 学生への情報提供と履修内容に関する意識の向上

履修登録時や履修カルテ作成などの機会を有効に利用し、学生の履修内容への意識を高め、自ら学ぶ姿勢を醸成していくことに取り組んだ。少しずつ意識の高まりは見られるものの、一部の学生に履修登録のミスが見られた。また、履修カルテの記入が不十分なものも散見されるなど、さらなる取り組みが必要である。

⑥ 学習環境の保証

今年度は、2年次生として100名を超える学生が在籍したため、時間割作成にあたっては、できるだけ2年生がE館・F館の大教室を使用できるように配慮した。また、後期「総合演習」でコンピュータ室を確保する、学生用ノートパソコンを10台補充するなど、学生が円滑に卒業研究を進めることができるようにするための環境整備を行った。

平成17年度より座席表を作成しているが、今年度も年間4回の座席替えを実施した。出席番号を基本に作成しているが、配慮を要する学生については柔軟な対応を行った。一方で、固定的なメンバーでの学習環境になることを避けるために、座席替えの際に3組と4組の列を左右入れ替える、1クラスをさらに2グループに分けて行う授業で奇数番号と偶数番号のグループを作る等の工夫を行った。

⑦ 休学、退学、留年について

平成28年度は、進路変更のため2名の学生が1年次2月に、1名が2年次8月に退学した。また、1名の学生が1年次9月より休学している。取得単位数不足のため留年していた学生は、次年度は2年次に進級することになった。これらの学生に対しては、担任を中心に個別相談や指導、保護者面談等、きめ細かな対応を行った。

(2) 現任教育への対応

平成28年度の「教員免許更新講習」では、「選択科目」(2講座12時間)を開講した。実施日は10月8日(土)、12月3日(土)の2日間、受講者数はそれぞれ82名、51名であった。また、富山国際大学子ども育成学部と共同で「幼稚園教諭免許状特例講座」を開催した。期間は7月2日(土)～12月18日(日)の土・日曜日計16日間で、50～80名の受講者が参加した。

(3) 教育課程懇談会の実施

① 2年生と教員による教育課程等懇談会

2年間の学びを通して感じた率直な意見を学生から聞くことを目的に、1月10日(火)に「2年生と教員による教育課程懇談会」を実施した。今年度は第14回目にあたり、2年生18名、学科教員9名の計27名で、教育課程、実習、学生生活等について懇談した。

② 教育課程懇談会

隔年で実施しているが、今年度は3月1日(水)に実施した。非常勤講師3名、兼担講師1名、学科教員9名の計13名で、教育課程、学生の勉強に対する取り組み、学生指導のあり方等について懇談した。

(4) 学生間の交流支援(学生相互の学習体験や実習体験の交流)

今年度も、昨年度に引き続き、学習や実習の体験を語り合う交流支援を行った。

- ① 学外研修での1・2年生の「交流会」の実施。
- ② HR等の機会を利用した、2年生から1年生への「実習連絡・報告会」の実施。
- ③ 講義を利用した交流支援(「保育者論」(2年)で1年生向け「実習ハンドブック」を作成・配付。「保育の心理学Ⅱ」(1年)「保育者論」(2年)の合同授業で、2年生が取り組んだ「ロールプレイング」を実施。)
- ④ 「総合演習発表会」「卒業演奏会」「運動会」への1年生の参加。
- ⑤ 「保育・教職実践演習」における「遊びの広場」の取り組み。

(5) 科目横断的授業実施の取り組み

昨年度に引き続き、「音楽Ⅱ-2 (オペレッタ)」「保育内容 (言葉Ⅱ)」「図画工作Ⅱ-2」(2年)の協働によりオペレッタの制作・公演活動に取り組んだ。また、「体育Ⅱ」「保育内容総論」(1年)「保育内容 (健康Ⅱ)」「家庭支援論」(2年)の合併授業として、学生の企画・運営による運動会を開催した。その他、実習指導や保育内容の表現系科目においても科目横断的な授業を実施し、教育効果や教員間の協働性を高める取り組みを行った。

(6) 基礎演習科目

教養科目「基礎演習」(1年)を開講して2年目にはいる。今年度も学びのためのスキルの向上を図ることを目的に授業を行った。レポート等の記述力、文献の検索力、読書力等の面で、ある程度の向上が見られたが、受講態度やレポートの期限内の提出等、学びの姿勢の面での改善への取り組みが必要である。

(7) 読書活動の推進

昨年度は、授業の中で利用を促したり、実習の際に絵本を携行するよう呼びかけたりした結果、付属図書館の貸し出し冊数は3倍に増えた。今年度も授業や実習で図書への貸し出しを促したところ、貸し出し冊数は昨年度よりもさらに2割程度増加した。

(8) 付属幼稚園との連携

今年度も昨年度と同様、学生の実習評価を中心に、幼稚園実習のあり方、位置づけ等について付属幼稚園教員との協議を2回行った。また、「保育・教職実践演習」で「遊びの広場」の活動を行った。

(9) 実践的社会力を身につけるための体験講座

今年度は、社会人としてのマナー・作法の向上をはかるために2年生を対象に接遇講座とワークルール講座を実施した。

(10) 指定保育士養成施設指導調査

今年度は、富山県による「指定保育士養成施設指導調査」が行われた。調査に先立って事前提出書類に含まれている「養成施設等の適正な運営」のための「自己点検表」に基づき、別添のとおり自己点検を行った。

指導調査の結果、出席簿、実習記録の出勤簿の整備、保育実習の実施時期に関する口頭指導があったが、特に文書をもった指示はなかった。

2. 課題

(1) Web シラバス機能を活用した授業改善の取り組み

本年度は、「保育内容 (言葉Ⅱ)」担当教員がFD・SD研修会において授業改善事例報告を行い、それを文書のかたちにもとめて「授業改善事例集」に掲載した。これを受けて、来年度以降は他の学科教員も授業の改善に取り組んでいきたい。

(2) 教員間の情報共有のあり方について

学科の教務に関する様々な情報については、教員間で情報を共有し、必要な時にすぐに閲覧・利用できることが望ましい。現在、業務担当者のみが保存しているデータを教員間で共有するためのシステム構築が求められる。同時に、データ共有のリスクを鑑み、必要な利用ルール等を設定することが必要である。

サイボウズが導入されたことにより学内の行事日程を確認できるようになったが、うまく活用されていない。また、学生指導のための情報を共有のようにしたい。

(3) 学生への情報提供と履修に対する意識の向上

今年度は、4月のオリエンテーション期間中に授業科目の履修、履修登録方法等、あらかじめ説明担当者を決めた上で、学科オリエンテーションを実施した。しかし、本学科では、後期は両学年ともオリエンテーションと実習の日程が重なるため、このようなかたちでのオリエンテーションの実施は不可能である。今年度は、後期の履修登録において授業科目の登録漏れや登録ミスがいくつか見られた。学生に対して注意を喚起する必要がある。

(4) 協働作業やグループ討議等による授業の実践

既に半数以上の授業において、協働作業やグループ討議等を採用している。今後、「授業改善報告書」でも順次採り上げていきたい。

(5) 地域課題の理解や解決に向けた取り組み

今年度は、「総合演習」の約半数のゼミにおいて地域をテーマとする研究の指導を行った。来年度以降も、富山県内の保育現場の様々な取り組みや歴史についての研究の指導を一層充実させていきたい。また、今年度は「未来の地域リーダー」の称号を与えるための授業科目を決定したが、来年度は個々の授業科目の教育内容について検討を進めていきたい。

(6) GPA の活用

GPA は、全学的に成績不振者に対する指導の指標として示されている。学科では、学外における実習への参加要件の一つとして活用している。また、学生の個別指導の材料として生かすことができるかどうかについて検討した。その他の活用方法についても、今後検討していきたい。

(7) 履修カルテ、実習評価表等と DP の関連性の検討

履修カルテ、実習評価表について内容を検討したが、DP との関連性にまで至っていない。今年度は DP の見直しを行ったので、来年度は履修カルテ、実習評価表と DP との整合性について検討したい。

(8) ラーニングスタジオを利用した社会活動

今年度も、2年生の「教育実習指導」での親子活動、「保育・教職実践演習」でのロールプレイング等でラーニングスタジオを使用した。その他の活用方法についても、今後検討していきたい。

(9) 学習成果評価システムによる学習時間の実態の把握

各授業科目担当教員は「授業アンケート」結果により学生の学習時間を把握することができるが、今年度は学科として学生の学習時間の実態を把握するには至らなかった。次年度の課題である。

(10) 富山国際大学との教室等の使用について連絡を緊密化

今年度も、学部・学科の行事、授業等のための教室使用に関して富山国際大学子ども育成学部と事前に連絡を取り合い、不都合が生じないように配慮した。来年度も一層連絡を密にとるように努めたい。

(11) 教育実践に関する共同研究の推進

昨年度に引き続き、音楽と造形のコラボレーション授業の協同研究を継続しているが、今年度は外部に向けての発表の機会はなかった。また、来年度に向けて他の授業に関しても共同研究が可能かどうか、検討していきたい。

(12) 特色ある保育者養成課程の検討

本学科の特長を最大限に生かした教育内容を示す「特色ある保育者養成課程」について検討中である。富山国際大学子ども育成学部との関係も考慮にいれながら、「感性」「表現」といったキーワードを軸に、具体的な特色づくりと養成課程への体系化に取り組んでいる。これらの特徴を新しい教育課程の中でどのように生かしていくかが今後の課題である。

〔別記〕平成28年度学生在籍状況（平成29年3月現在）

1年 在籍 88名

2年 在籍 106名

3. アクションプランとの関連

【指針1：教育】 1-(3)-③ 附属幼稚園との連携を強化

「1. 現状 (8)」で述べた通り、附属幼稚園教員との協議を2回行った。また、「保育・教職実践演習」で「遊びの広場」の活動を行った。

【指針1：教育】 1-(4)-① 教養・知性、課題解決のための読書活動、情報収集活動

「1. 現状 (7)」で述べた通り、授業や実習で図書貸し出しを促したところ、貸し出し冊数は昨年度よりもさらに2割程度増加した。

【指針1：教育】 1-(4)-② 科目協働による総合的な授業の実施

「1. 現状 (5)」で述べた通り、「音楽Ⅱ-2 (オペレッタ)」「保育内容 (言葉Ⅱ)」「図画工作Ⅱ-2」の協働によりオペレッタの制作・公演活動に取り組んだ。また、「体育Ⅱ」「保育内容総論」「保育内容 (健康Ⅱ)」「家庭支援論」の合併授業として運動会を開催した。

【指針1：教育】 1-(4)-④ ラーニングスタジオを利用した社会活動を検討

「2. 課題 (8)」で述べた通り、「教育実習指導」での親子活動、「保育・教職実践演習」でのロールプレイング等でラーニングスタジオを利用した。

【指針 1：教育】 2-(5)-① 協働作業やグループ討議等による授業の実践

(【指針 1：教育】 4-(12)-①再掲)

「1. 現状 (4)」で述べた通り、学習や実習の体験を語り合う交流支援を行った。また、「2. 課題 (4)」で述べた通り、半数以上の授業において協働作業やグループ討議等を取り入れている。

【指針 1：教育】 2-(5)-② 地域課題の理解や解決に向けた取り組み

(【指針 1：教育】 3-(8)-①、【指針 1：教育】 4-(12)-②再掲)

「1. 現状 (1) ④」で述べた通り、「総合演習」の約半数のゼミにおいて、地域をテーマとする研究の指導を行った。また、「未来の地域リーダー」の称号を与えるための授業科目を指定した。

【指針 1：教育】 2-(6)-① 基礎演習科目の開設

「1. 現状 (6)」で述べた通り、「基礎演習」においてレポート等の記述力、文献の検索力、読書力等の面で向上が見られた。

【指針 1：教育】 2-(6)-① GPA の活用

「2. 課題 (6)」で述べた通り、GPA を学外における実習への参加要件の一つとして活用している。また、学生の個別指導の材料として生かすことができるかどうかについて検討した。

【指針 1：教育】 2-(7)-① 子ども育成学部と教室等の使用について連絡を緊密化

「2. 課題 (10)」で述べた通り、教室使用に関して富山国際大学子ども育成学部と事前に連絡を取り合い、不都合が生じないように配慮した。

【指針 1：教育】 2-(7)-② 貸し出し用 PC、プリンターの適正な取り扱いを徹底

「1. 現状 (1) ⑥」で述べた通り、後期「総合演習」でコンピュータ室を確保する、学生用ノートパソコンを補充するなど、学生が円滑に卒業研究を進めることができるようにするための環境整備を行った。

【指針 1：教育】 3-(10)-① 産官学協働プログラムの実施

「1. 現状 (1) ⑥」で述べた通り、2年生を対象にマナー講座とワークルール講座を実施した。

【指針 3：地域貢献】 2-(6)-① 保育者の現任教育に参加

「1. 現状 (2)」で述べた通り、「教員免許更新講習」「幼稚園教諭免許状特例講座」を実施した。

1. 現状

(1) 実習計画と履修状況

保育士資格取得希望者の必修選択科目として、1年生 87 名が履修した（2 名は新潟県、1 名は石川県で実習）。

(2) 麻疹等小児期ウイルス感染症への対応について

入学時健康診断による「麻疹抗体価測定血液検査結果票（写し）」を、富山市及び高岡市で実習を行う学生に持参させた。

(3) 特別講義を通じた学び

例年通り、富山市立保育所所長による特別講義を実施した。保育実習 I -1 で対象となる乳児の保育について理解を深めると共に、現場保育士から「自らの実習体験や保育士の仕事で感じていること」「実習生へのメッセージ」が伝えられ、学生たちは保育所での未満児実習への意欲を高める機会となった。

(4) 保育実習 I - 1 実習懇談会の開催（2016 年 12 月 15 日）

実習受け入れ先の 8 園から参加があり、保育実習の現状と課題について協議した。

2. 課題

(1) 事前指導について

体調不良による休みの報告の不備（実習先、本学に対して）、その他書類の不備が処々に見られた。個別指導担当教員と連携しつつ、授業での事前指導を丁寧に行う必要がある。特に、今年度より新しい書式を取り入れた出勤簿と事前訪問レポートについて記入・活用の仕方を徹底したい。

(2) 実習日誌について

実習初日は「流れ記録」で、1 日の生活の流れを項目ごとにとらえて記すよう指導している。「流れ記録」は学生にとっては初めてなので丁寧な指導が必要である。現在、実習日誌の書式は「エピソード記録」に対応しているので、書式の作成を含めて検討していきたい。

(3) 指導計画の作成について

保育実習 I -1 では指導計画案の作成は課していないが、本人が希望したり、実習先が適当と認めた場合には実施している。関連教科及び教育実習 I と連携しながら指導案作成についても指導した。しかし中には、全日担任、半日担任の指導案を実習先から課された学生もいたことから、作成する指導案の範囲については実習先と調整してすすめていきたい。

3. アクションプランとの関連

【指針 I : 教育】1 - (3) - ② 出勤簿、事前訪問レポートの書式を改善し、実習指導を強化した。また、保育実習懇談会を開催し、指導体制の改善・充実を図った。

1. 現状

(1) 平成 28 年度 保育実習 I-2 日程表

(2) 実習の状況

1 学年 87 名の学生が第 1 班 (21 施設 45 名)、第 2 班 (18 施設 42 名) に分かれて実習を行った。実習期間中に、病気などで実習を欠席する学生や大きなトラブルもなく、全員が順調に実習を終えることができた。

(3) 2 年生からのガイダンスの実施

平成 29 年 1 月 18 日 (水) 5 限に、事前指導の一環として、2 年生からの施設実習ガイダンスを、配属施設別に実施した。学生は、特別講義と事前学習で施設の概要はおおよそ理解していたものの、実際の実習がどのように進められたのか具体的な話を聞くことで、実習及び施設への理解を深め、実習の不安感の軽減、実習への意欲的参加につながった。

2. 課題

(1) 実習の手続き等の再検討

保育実習 I-2 では、施設によって日程や手続の方法、必要な検査内容や書類などが異なり、それぞれの要望に応じたかたちで対応を行っている。今後も、個別に対応することを基本としながら、可能な範囲で共通化していきたい。併せて各種様式についても、改善を行っていききたい (依頼状の内容、事前・事後報告書類の内容等)。

(2) 実習施設の受け入れ

近年、宿泊を伴う実習が困難となっている中で、学生の実習受け入れ先の確保は相当難しくなっている。通勤方法の制限もあり、今年度も昨年度に引き続き障害者の通所施設を実習対象施設に含めることで対応した。また、今年度から、すべての実習期間で富山大学と重複することとなったため、調整が難しくなっている。

(3) 事前・事後指導の充実

施設ごとに行う 2 年生からのガイダンスは、細かい注意事項や配慮等が丁寧に伝えられていて効果的であった。施設の現場の方からの特別講義は、施設における保育士の役割理解の促進につながった。事前・事後指導の充実を図るとともに、関連する学習科目の内容を繋げ、学びに活かされる実習となるよう位置づけて取り組む必要がある。現在は実習後に開講される「障害児保育」の開講時期についても、引き続き検討していく必要がある。また冬期間の実習となるため、通勤の危険に対する安全対策や感染症に対する予防対策を徹底していきたい。

3. アクションプランとの関連

【指針 1 : 教育】 1-(3)-② 実習指導の体制を点検・強化

保育実習指導 I (保育所関連)、教育実習 I の担当者と連携を図り、実習の基礎的事項が確実に定着するような指導内容としていきたい。

1. 現状

(1) 指導内容の充実

特別講義や施設見学を通して、現場の先生方から学ぶ機会を設けたり、グループで課題に取り組むなど、実習に必要な知識を多様な方法で学ぶことができた。教育実習 I と連携しながら日誌の書き方・指導案の作成について授業を通じて指導した。

(2) 実習中及び事前事後指導

県外の学生を含め学科教員全員で実習中及び事前事後指導が丁寧に行えた。特に、実習の欠席連絡、日誌の提出の遅れなどの問題に対して、担当教員を中心に素早く対応し、実習先と連携をとりながら実習参加を進めることができた。

(3) 実習を通じた学びの継承

事前指導の一環として、2年生が、1年生に対して自らの実習体験を通して学んだことを伝え、1年生の疑問・質問にこたえる「実習報告会」を実施した。保育実習 I-1の前には、2年生が保育者論の授業で作成した「実習ガイドブック」が1年生に配布され、実習生の視点からの情報が提供された。保育実習 I-2の前には、施設ごとにグループを編成して話し合い、1年生にとって、初めての施設実習に対する不安感を解消し、意欲をもって実習に臨めるきっかけとなった。

2. 課題

(1) 指導内容の充実

保育実習 I-1 では実習先によっては部分担任が求められる。意欲的に部分担任に取り組めるような事前の指導が必要である。今年度より事前訪問レポートに「準備した教材」を記入するようにした。引き続き、他の授業と連携しながら、教材準備をすすめるとともに、準備した教材を使った部分担任実習の指導案の作成で教材が活用できるよう指導していきたい。

(2) 実習事前指導の充実

実習目標の記述が抽象的・一般的、出勤簿の表記の仕方の不備等今年度課題がみられた点を中心に、実習オリエンテーションでの指導を充実させる。また、実習参加のマナー等実習先から指摘を受けたことを踏まえ、『学外実習の手引き』に基づき丁寧な指導を行っていきたい。

3. アクションプランとの関連

【指針 I：教育】1-(3)-② 事前訪問レポート（保育所実習用）と出勤簿の改善で、実習事前指導を強化するとともに、実習時間が適正であることを検証した。

【指針 I：教育】2-(5)-① 2年生による実習報告会の実施等、実習を通じた学びを継承する機会を設定した。

I - 2 - ④ 保育実習Ⅱ・保育実習指導Ⅱ 担当 [中山・梅本]

1. 現状

(1) 実習計画と履修状況

平成28年6月20日(月)～7月1日(金)、2年生99名が県内90箇所、県外5箇所ですべて10日間の実習を行った。

(2) 実習指導Ⅱ授業と事前・事後指導

教育実習指導と連続的に取り組む内容として保育実習Ⅱの事前学習「指導案の作成」「教材研究」、事後学習及び教育実習Ⅱの事前学習「教材研究」を行った。どちらの実習も3歳以上児を対象とする実習のため、担当教員間で指導内容を昨年度の取り組みを元に計画した。教材研究・準備の時間を増やし、個別に作成した教材を発表する機会を作り、技能の向上を図るとともにレポートの比重が高かった評価に教材研究と表現技術を加えることで多面的に評価することができた。

2. 課題

(1) 実習指導における学習内容の充実

本学幼児教育学科は2年前期(6月・9月)に保育実習Ⅱ・Ⅲと教育実習Ⅱを実施する。いずれの実習Ⅱも3歳以上児対象で行われ、本格的な部分・全日実習に取り組む。2年後期には実習が行われないため、前期の各実習指導において集中的に事前学習をすることになる。特に「指導案作成」は、学生自身の苦手意識が強く、年齢別の子どもの姿のイメージが曖昧な学生も少なくない。実習では子どもたちと関わりながら状況を踏まえた上で、ねらいや活動を設定・計画して実践する必要がある。すでに教育実習指導や保育内容(造形表現Ⅱ)の担当者間で共通理解を図り、合同・連携して指導に取り組んでいる。さらに、実習日誌・記録と指導案作成は1年前期の保育実習指導Ⅰ・教育実習Ⅰから繋がり、体系的に段階を踏まえて連携しながら学ぶことが必要だと考えられる。

(2) 実習先の重複

教育実習Ⅱ(幼稚園)の実習先は1年次2月中旬から2年次4月初旬の期間に内諾を得る。保育実習Ⅱは年度初めに実習連絡協議会へ名簿を提出し、各市町村で配属を依頼している。幼稚園の減少とこども園の増加により、二つの実習が同じ実習先になるケースが出てきた。今年度は保育実習先に理由を説明して他の学生と交換し、異なる園で実習する方法を選択した。今後も同様のケースが考えられるため、実習連絡協議会に教育実習予定先を連絡するなどの対策が必要であると考えられる。

3. アクションプランとの関連

【指針1:教育】1-(3)-② 実習指導の体制を点検・強化

実習指導担当者が中心となり、実習先担当者と共に指導体制や実習方法の状況や課題について意見交換し改善を図る。

I-2-⑤ 保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲ 担当 [石動・大森]

1. 現状

(1) 実習の状況

今年度の履修者は7名で、児童養護施設（富山市立愛育園、ルンビ二園）で2名、知的障害者の支援施設等で5名（セーナー苑、四ツ葉園、めひの野園、いみず苑、あすなろ）が実習を行った。教員との対話の時間を十分にとり、実習Ⅰ-2での学びの確認や施設種別に応じた研究課題への取組みなど、少人数ならではの指導に努めた。ほとんどが就職を考慮した実習選択であり、実習での体験が、施設保育士（支援員）としての適性を見きわめる機会となったようである。

2. 課題

(1) 実習施設の選定について

保育実習Ⅱ（保育所）との選択実習であり、履修者数は以下のように推移している。

年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度
人数	11名	9名	7名	3名	1名	7名

実習指導の講義やヒアリングの機会を通して、実習Ⅲ選択は、就職も視野に入れて選択するように指導した。そのためか、履修者の半数以上（5名）が福祉施設に就職することとなった。保育所での実習を避けたいという消極的理由で選択することがないようにと考えた指導であったが、様々な種別の施設で、新たな学び・価値観を得たいという学生の思いには応えることはできなかった。2年間の学びでは、就職を見すえ、必要な保育技術を確実に獲得することが重要であることから、個々の思いを丁寧にとらえ、適切な実習施設の選択・選定につながるような指導を心がけなければならない。

(2) 事前・事後指導の内容について

実習Ⅰ-2の学びをさらに深化させるための事前・事後指導の充実が必要である。少人数クラスのメリットを生かし、個別指導とグループワークを織り交ぜながら、社会的養護内容についての学びを深め、実習課題への主体的取り組み姿勢を育む指導内容が求められる。

3. アクションプランとの関連

【指針1：教育】1-(3)-② 実習指導の体制を点検・強化

保育実習Ⅲ履修者が、指導案作成や責任実習実施のための演習を受けることができるように、教育実習指導及び保育実習指導Ⅱ（保育所）の担当者と連携を図り、合同講義の実施を行った。今後も各担当者と連携を図り、実習指導内容を充実させていくこととする。

1. 現状

別添の授業計画に沿って実習と事前・事後指導（反省会）等を行った。1年次の前期には前半に観察実習を4サイクル行い、その後、講義と並行して参加実習を行った。9月には、4日間ずつの参加・部分担任実習を行った。

5月の観察実習に入る前に、幼稚園の概要について伝え、本実習の意義について、4月中に説明を行った。また、「実習日誌の書き方」のテキストを用いて基本的な部分について講義を実施した。

入学直後、はじめての実習として園児や実践の場に関わることで、保育者をめざすことへの動機づけにもつながり、本実習は重要な位置づけとなっている。

(1) 観察・参加実習（1年前期前半 5月12日～6月28日）

学生数は88名、配属される保育室は5クラスである。1クラスにつき学生数11名になるようにグループ分けし、観察実習を行った。参加実習では、1クラスに4名～5名配属されるようにグループ分けして、1班が実習中には別の班は学内で講義を行うなど、実践と並行して知識・技能の獲得を目指した。さらに、参加実習を終えた段階で反省会を行い、学生自身の自覚を促した。

(2) 参加・部分担任実習（1年前期後半 9月5日～9月28日）

参加・部分担任実習に向け、実習内容を考慮した指導案の書き方指導を行った。前年度同様、実習生が園児の前で行う「手遊び」をテーマに設定した。そのため、指導案の書き方指導もそこに照準を合わせて行った。その際、付属幼稚園と協議の上で内容設定を行い、連携して進めることができた。幼稚園からは、「手遊び」がテーマになったことで、実習生が来るたびに新しい遊びを紹介してくれ、園児が家でも再現するほど楽しんでいるなど、おおむね肯定的な意見が多かった。また、前年度、幼稚園から指摘があった、音程のズレなどについては、グループ内で楽譜をきちんと確認するよう指導を行った。

部分担任実習では1クラスにつき4名～5名配属されるように、学生をグループ分けした。学生は、学内であらかじめ1人1枚ずつ作成した指導案を持って9月の実習に臨んだ。全日程終了後9/29の登校日に、「実習反省会」として、4日間の実践を踏まえた上で、各自の指導案を改めて丁寧に仕上げ、省察した。

2. 課題

実習期間中、遅刻・欠席する学生や、日誌を決められた期日に提出できない学生が数名いた。単位不認定となる学生もあり、多様な学生に対する指導や評価の方法など、実習指導の体制を強化していく必要がある。

3. アクションプランとの関連

【指針 I. 教育】1- (3) - ③ 付属幼稚園との連携を強化

学科教員間や付属幼稚園との連携・強化をより一層図り、実習のあり方を検討する。

1. 現状

(1) 実習計画と履修状況

平成28年9月8日(木)～9月30日(金)のうちの10日間で、2年生104名が県内54か所、県外5か所(新潟県4か所、石川県1か所)で実習を行った。なお、そのうちの1名は実習を途中で中断し、履修を中止した。また、体調不良のため、上記の期間を超えて計10日間の実習を行った者もいた。

(2) 実習園の調整・確保

毎年、9月に県内の2大学が3週間、本学が2週間の教育実習を行うため、3校で連絡を取り合い、各校で事前に調査した学生の実習先の希望数をもとに、富山県内の公立幼稚園は富山大学で、その他の県内幼稚園は国際大学と富山短大で園に受け入れ可能学生数を1月から2月にかけて伺い、調整を行った。なお、これまでは富山大学は富山市内の公立幼稚園のみの受け入れ可能学生数の調査を行っていたが、今年度からは、富山市内にかかわらず県内の公立幼稚園全ての受け入れ可能学生数を、各市の代表園に一括して調査することになった。また、実習期間については、多くの園で運動会などの大きな行事と重なっており、実習生の受け入れが困難な時期であることから、来年度も、学生数が多かった今年度に引き続き、実習期間を平成29年9月7日(木)～9月28日(木)のうちの10日間とし、園が希望する実習期間で受け入れていただく方法で依頼を行った。

(3) 学生の意欲と学び

2年生の9月は、就職が内定している学生、公務員や民間の採用試験を控えている学生がおり、実習への意欲や準備が十分ではない学生が見られる。また、6月の以上児実習を終えたばかりでもあり、同年齢の子どもを対象とした実習に慣れが生じている様子も窺われる。

2. 課題

(1) 他校との連携と調整時期及び受け入れ先の確保

今年度も9月に実習を行う3校で実習先の調整を行ったが、県外に進学している実習生の受け入れや行事との重なり、指導できる教員の不足、在園児の少なさ、こども園への移行途中による多忙などを理由に断られるケースも少なくなかった。特に、今年度は砺波市の受け入れが1名ときわめて少なく、他4名は富山市内の園に配属することとなった。また、毎年、3校のうち、富山短大が学生への実習先園の開示が最も早い、他大学の担当者となかなか連絡が取れないことから調整が進まず、学生への開示を予定よりも遅らせることとなった。今後は3校の調整の開始時期を大幅に早め、こども園を含めて受け入れ可能な実習先の開拓などを検討する必要がある。

(2) 実習の実施期間と学生の意欲

9月は運動会を行う園が多く、多忙な状況での実習生の受け入れは、部分や全日実習を実施する時間の確保が難しい反面、行事運営や準備、練習を体験できることの良さがあるだろう。2年生の夏休み中という、就職試験に備える学生もいる時期に、学生の意欲を高める指

導を一層熱心に行っていく必要がある。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅰ：教育】 1－(3)－② 「実習指導の体制を点検・強化」

学科教員間や実習受け入れ先との連携をより一層強化し、学外実習の有り方を検討する。

1. 現状

2年次の通年科目（実習・1単位）として実施。授業の第1回から4回の4コマ分は、附属みどり幼稚園にて、「入園準備1日実習」として実施。園児は春休み中の為、登園していないが、幼稚園の各クラス担任の指示のもと、新クラスの受け入れ準備や、園庭の環境整備などを行う、毎年恒例の貴重な機会となっている。

本来は「教育実習ⅠおよびⅡの事前・事後指導」の授業であるが、平成24年度より6月の保育実習Ⅱ・Ⅲを控えた前期については、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と連動して、実習日誌と指導案の書き方について多くの時間を充てている。

指導案については、保育者の配慮点についてのイメージを高められるよう、作って遊べる手作りおもちゃ製作を「造形表現Ⅱ」で行い、学生が自分の作品を手にした状態で、「教育実習指導」の時間内に、作成に取り組んだ。また、集団遊びを想定した指導案作成にも取り組んだ。これらの取り組みによって、学生が苦手とする「ねらい」と「内容」のとらえ方や、「予想される子どもの活動」に対する保育者の援助や配慮について何をどのように記入していけばよいか、イメージしやすくなったものと思われる。

後期は、教育実習Ⅱの振り返りを目的とし、「実習の中でうまくいったと思うこと、良かったと思うこと、うまくいかなかったこと」について、エピソード形式で詳細に記述した。各自のエピソードをグループごとに発表し合い、良かったものを2つ選び、全体で発表を行った。授業アンケートには、「他の人の実習体験を聴くことが出来たためになった」という学生の意見もあり、体験を分かち合うことの意義が感じられた。

2. 課題

指導案の活動内容やねらいの具体化

指導案については、少しでも学生がイメージしやすいよう、わかり易いテキストを活用したり、造形表現の授業とつなげたりと工夫はしているものの、各々の学生が配属された実習先の担当クラスの年齢や子どもの実態に合わせた活動内容、それに対する「ねらい」の具体化が、まだまだ難しいようである。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅰ. 教育】1-(4)-④ ラーニングスタジオを利用した社会活動を検討

後期の実習の振り返りにおいては、A館のラーニングスタジオを積極的に活用した。これによって、グループ討議が進めやすくなったり、ステージでロールプレイを発表したりと、スムーズな協働作業や課題解決学習に取り組むことができたと思われる。

1. 現状

(1) 富山県保育実習連絡協議会の開催及び報告

平成 28 年 12 月 20 日（火）13 時から 15 時、事務担当校の富山福祉短期大学において、県内保育士養成校 6 校が会し、平成 29 年度実習日程の調整及び保育士養成に関わる現状と課題等について協議した。今年度事務担当校として事務報告を行い、配属依頼の際に行政区と実習生の住所の照会を入念に行うことを確認した。

その他の協議事項としては、認定こども園での実習の現状、公立保育士採用試験日程、実習日誌の書式、実習時間の取扱い、持病を持つ学生の実習指導、実習謝礼等について、各校の現状や取り組みを情報交換した。

(2) 保育士養成・確保に関する意見交換会への出席（2017 年 2 月 7 日）

今年度初めて富山県児童青年家庭課の呼びかけで「保育士養成・確保に関する意見交換会」が開催された。富山県保育連絡協議会をはじめとした保育関係団体、社会福祉協議会と保育士養成校で忌憚のない意見が交わされ保育士養成・確保の現状と課題について協議された。

2. 課題

(1) 他校との連携と調整につて

〈保育実習Ⅰ-2：富山大学〉〈保育実習Ⅲ：富山福祉短期大学〉〈教育実習Ⅱ：富山大学・富山国際大学〉の 3 実習が他校の実習期間と重なっている。施設や幼稚園での実習は受け入れ可能人数が限られているため、保育実習Ⅲ以外は事前に各校の担当者間で調整を行っている。教育実習Ⅱは今年度より期間を指定してその内の 10 日間の実習としているが、3 校同時に 130 名以上の学生が県内で実習を行う期間があり、今後も園の減少が続く場合は、時期の変更も視野に入れて、再度検討することが問われている。

(2) 実習時間の取扱いについて

東海北陸厚生局は 90 時間の実習、ただし 1 日 9 時間の滞在は問題なしとしている。本学では今年度より出勤簿に出退勤時間を明記しているが、90 時間が確保されているかを再度見直し対応していきたい。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅰ：教育】1-(3)-④ 実習連絡協議会及び保育士養成・確保に関する意見交換会に参加し、実習及び採用選考のシステム等について富山県保育連絡協議会等の現場の代表者と意見交換し、連携を深めた。

1. 現状

(1) 事前・事後指導

保育や施設の理解を深める体験学習であり、夏期休業期間を有意義に過ごすための貴重な機会として、自主実習参加を学生に奨励した。学生自身が実習希望先と連絡を取り内諾を得た後、7月中旬までに書類と検便を提出した。「事前・事後の流れ」「配慮・注意事項」「事後報告書」「礼状の記入例」「依頼電話の掛け方」等の資料を作成し事前学習の充実に努めた。実習中はトラブルもなく、報告書の提出状況は良好であった。

(2) 実習状況

			1年			2年			計	
			今年度	参加率	昨年度	今年度	参加率	昨年度	今年度	昨年度
在籍数			88	88.6%	110	106	15%	83	194	193
実習者数			78		85	16		24	94	109
実習件数	公立	保育所	19	24	1	0	20	24		
		こども園	1	2	0	0	1	2		
		幼稚園	2	3	1	0	3	3		
		施設	1	0	0	0	1	0		
	私立	保育所	28	47	8	18	36	65		
		こども園	23	4	6	3	29	7		
		幼稚園	4	6	2	6	6	12		
		施設	0	0	0	0	0	0		
	計		78	86	18	27	96	113		

2. 課題

(1) 実習参加率の改善

1年生の参加率は約89%で、昨年度の77%より改善したが、一昨年の95%には届かなかった。実習先を探し、自ら交渉・手続きを進めることに対する不安を軽減するため、電話の掛け方をシュミレーションしながら練習したり、学生生活に慣れ始めた6月中旬にオリエンテーションを繰り返し下げたりしたことが、抵抗感を和らげ参加率を改善する一因になったと考えられる。2年生は昨年度よりさらに参加率が低くなった。2年生は、「就職先を検討・比較・絞り込むための実習」と捉える傾向が強い。公務員採用試験・合同福祉職場説明会や、施設が企画する職場見学や1日体験を含めて、各自の就職先に対する情報や希望を整理し、無理のない実習計画を立てることが必要だと思われる。

(2) 実習日数の減少

2年前までは1施設につき5日間の実習をする割合が最も多かった。昨年・今年度は85%の学生が3日間の実習を選択している。前期試験・補講、追再試や教育実習が含まれるとともにアルバイトや余暇の時間を確保しようとする傾向が強くなっていると考えられる。

3. アクションプランとの関連

【指針1：教育】1-(3)-④

自主実習参加率を高めるため、実施期間確保やオリエンテーションの充実に努めた。

1. 現状

(1) 各研究分野への配属と研究・調査の実態

今年度は、「心理」を含む9つの研究分野を設定し、10名の専任教員が担当した。各教員の担当学生数は4～14名であり、班編成は全体で24班となった（前年度25班）。

(2) 中間発表会

大学祭の学科企画としての中間発表会では、各班がポスターで調査研究の全体像を効果的に表す工夫を重ね、収集した情報を整理することで研究の今後の見通しを立てることができた。来場者にはアンケートを実施、1年生には中間発表の感想レポート提出を課し、次年度の総合演習に向けての動機づけとした。

(3) 『総合演習第40集』について

研究成果を簡潔に要領よくまとめることができるように、記録集の書式を大幅に変更した。ページ数は調査系の研究、実技・製作系の研究ともに4頁とし、書式を二段組みに改めた。記録集の学外施設への事前配布については、県内保育士養成校、幼児教育研究会後援団体、県厚生部、県経営管理部文書学術課に送付した。昨年度までは、各班の調査協力施設（者）にも学生がお礼と報告に伺う際に記録集を配布していたが、今年度は該当班で記録集の抜き刷りのコピーを必要部数印刷して配布するよう指導した。

(4) 総合演習発表会

E館7階で2会場に分かれて、各会場でできるだけ多くの分野の研究発表が行われるようにプログラムを構成した。当日の運営は、学生運営スタッフが中心となって行った。すべての班がパワーポイントを使用し、制作物を提示する班もあった。今年度は特に、富山の認定こども園、富山の幼稚園における英語教育、富山の保育の先人、富山の保育所における黒板の使用、富山の伝説など、地域に関するテーマの研究が多く見られた。

2. 課題

(1) 地域をテーマとする研究

富山県内の保育現場の様々な取り組みや歴史についての研究の指導を一層充実させていきたい。

(2) 発表会の充実

発表会への積極的な参加を促すために、できるだけ事前に記録集配布後に目を通し、研究への興味関心を高める機会を設けるなど工夫していきたい。

(3) 学習環境の充実

プリンター、ノートパソコン、文具の適正な使用についての指導・管理を徹底させる。

3. アクションプランとの関連

【指針3：地域貢献】3-(8)-① 地域志向カリキュラムの充実

「1. 現状 (4)」で述べた通り、富山県内の保育現場の様々な取り組みや歴史について積極的にテーマに採り上げた。

1. 現状

(1) 授業の概要

保育士・幼稚園教諭が身につけることの必要な「4つの資質能力」(①使命感・責任感・教育的愛情と感性 ② 社会性・対人関係能力 ③ 乳幼児理解やクラス経営 ④ 保育内容の指導力)を3クールとして構成。保育・教育現場から講師を招き、テーマに関する講義とグループ演習、みどり野幼稚園の子どもと保護者を対象とした実践活動を行い、4つの資質能力の修得をはかった。

(2) 授業の進め方

昨年度の課題をふまえて、今年度は外部講師からの講義数をさらに減らし、グループ演習のテーマ設定など工夫した。また、幼児理解と保育指導に関する内容をテーマとするクール(上記③④)については、みどり野幼稚園の子どもと保護者を対象に放課後「遊びのひろば」の実践活動を計画し、実施した。3グループでそれぞれ遊びのテーマを決め、幼稚園への参加案内、指導案の作成、遊びの準備と当日の環境構成、遊びの運営等役割を分担しながら学生自らが行った。実際に園児と保護者を対象として実践活動を行うことで実践力の修得へとつなげることができた。

(3) 成績評価の方法

各クールの評価点(課題レポートの内容を中心に評価したもの、実践活動後のレポートと取り組み姿勢を評価したもの)を平均化して総合評価とした。

2. 課題

(1) 授業参加態度及び授業の工夫について

従来から課題であった保育実践力向上につながる内容を「遊びの広場」実践活動として展開することができた。しかし、1グループの人数が多く、責任の所在が不明確になったり学生の取り組み方にばらつきが生じた。時期及び実施方法のさらなる工夫・改善が必要である。また、講義内容のまとめや演習課題の討議・発表を通して、4つの資質能力の理解は図られているものの、全体として「自己課題の発見」へのつながりは不十分である。この点においても、指導内容や方法の検討が必要である。

(2) 評価方法や観点について

これまでの学びをまとめ、保育者としての成長を確認する科目であるという性質上、細やかな観点による評価を行いたいところだが、評価の観点等、具体的な検討を行うことができなかった。引き続き次年度の検討課題としたい。

3. アクションプランとの関連

【指針 I : 教育】2-(5)-① 協働作業やグループ討議を重視し、互いに発表し合うことに加えて、実践活動を設定することで、アクティブ・ラーニングによる学びが深まるように工夫。

Ⅱ－１ 学生指導

担当[大森、石動、中山]

1. 現状

(1) 休学、退学、復学について

退学	1年生	2名	(2015年4月入学 2016年4月入学)	2017年3月	退学	進路変更)
	2年生	1名	(2015年4月入学)	2016年9月	退学	進路変更)
休学	1年生	1名	(2016年4月入学)	2016年9月～2017年3月まで 休学延長予定 一身上の都合)		

(2) 学業への姿勢

1年生：学業不振者は少なく受講態度において特に問題はなかった。

留年学生：自己管理が難しく授業に出てこないことが多くなっていた。担任は保護者を含めた3者面談において生活面の指導もおこなった。また各担当教員から欠席状況の情報を集約して個別指導を徹底した。科内会議においても状況確認をして教科担当者も対応をした。

2年生：後期の幼稚園実習の終了後、就職活動が一段落した中盤から後半にかけて、一部の学生に受講態度の乱れが見られた。

(3) 健康面での指導

健康に不安を抱える学生については、実習指導や授業において教科担当と対応について個別に指導を行った。保健室とも連絡を取り合い、学生の情報を共有しながら指導を行った。

2. 課題

(1) 健康上の留意

健康上の悩みを持つ学生については、入学時より健康診断、個別面談等によりできるだけ早く保健室保健師や学科担任、教科担任と連携を取り合い個別的な対応をとれるようにすることが求められる。

(2) 学生指導の在り方

提出物や資料など管理することが難しい学生や集団での活動において協調性のない学生については各教科担当や担任が指導を行っているが、学生に応じたより丁寧な指導が求められる。

学業不振の学生、健康面での問題を抱えている学生について定期科内会議において情報を共有しているが、今後さらにそのような学生に対しては科内で連携して指導に当たることが必要である。

(3) 学生への情報提供

授業や実習、行事などの情報提供は、掲示板や携帯電話でのメールなどで発信しているが、学生まで届いていない状況がある。学生への情報提供が徹底できるような発信の方法と、受け手となる学生の意識を指導する必要性がある。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅱ：学生支援】 2-(6)-① 障がいのある学生への対応強化に向けてFD研修へ3名の教員が参加した。

1. 現状

(1) 指導の進め方

担任・副担任を中心に、学科教員、就職支援センターの協力を得ながら、年間指導計画に基づいて行った。1年次は、1、2月に就職支援センターによる進路ガイダンス、3月には、外部業者による就職試験教養科目対策講座を実施した。2年次は、「進路指導・ホームルーム」(前・後期)を時間割に組み込み、系統的に指導をした。履歴書作成指導、専門科目特別講座、保育士就職模擬試験、先輩と語る会、模擬面接、小論文・作文指導、私立幼稚園教諭受験対策(面接、ピアノ実技)等を実施した。「ハローワーク富山」職員による模擬面接を踏まえ、個々の学生の応募先に合わせて学科教員が個別に面接指導を行った。作文指導は、「国語表現」担当教員と2年担任・副担任が担当した。また、福祉職場合同説明会への参加及び自主実習を奨励し、応募先を決めていくよう指導した。1月下旬には、実践的社会力向上事業の一環として「接遇マナー講座」を実施し、4月から就職するに当たって、社会人として必要な接遇の知識と態度を身に付けた。

(2) 求人及び進路内定状況

前年度同様、早期より求人依頼があり、年間を通して絶えることが無かった。今年度の求人件数は、県内は133件、県外は146件で、前年度比は県内26.7%増、県外23.7%増であった。求人のほとんどが、私立保育園である。私立の施設(主に保育園)の採用試験は、公務員(市町村保育士)採用試験との併願が可能であるケースが多く、学生は機会を逃すことなく応募し、早い時期に就職先を確保することができた。公務員採用試験は、延べ63名が受験し、19名が合格した。

(3) 公務員試験対策

①教養科目対策講座を受ける ②自分の就職したい市町村を決める(可能ならば複数)
③勉強スタイルの確立と参考書・問題集の選定 を早い時期から行うよう指導した。1次試験合格後は、エントリーシートの作成を担当・副担任と学科長で行った。エントリーシートの内容が面接につながることを意識して、話し合いながら丁寧に作成指導を行った。面接練習は担任・副担任がまず行ったうえでさらに複数の教員から受けられるようにするが、個々の学生の状態に合わせて臨機応変に対応した。

2. 課題

(1) 求人への対応

保育者確保のため、本年度も求人活動が活発に行われた。求人条件は多様であり、学生の受験先にかなりばらつきが見られた。県内のすべての園と良い関係を保つためにも、学生に対する求人情報提供を徹底させると同時に、必要に応じて求人先に対して連絡を取り、希望者の有無や地域別の内定状況をすみやかに報告するなど、誠意ある対応が必要である。

(2) 公務員採用試験対策

今年度は54名の学生が教養科目対策講座を受講したが、この中には公務員採用試験合格者19名の内18名が含まれている。また、保育士就職模擬試験は49名が受験、そのうち18名が公務員採用試験に合格している。公務員保育士を目指す学生には、必ずこのような講座や模擬試験を受けるよう指導することが望ましい。

(3) 内定後の学生指導

就職内定者に対しては、就職先が決まっても気を抜かずに、その後の授業、実習、卒業研究などに真摯に取り組むよう指導してきたが、一部の学生には気の緩みが見られた。昨年度と同様に「接遇マナー講座」を実施するとともに新しく「ワークルール講座」をが、内定後も見通した就職支援計画が必要である。

(4) 専門職への就職率

専門職への就職率が低下した。学生は専門職へのあこがれを抱いて進学してきたはずである。専門職への就職を変更した理由を調べ、就職支援のありかたを考える必要がある。

3. アクションプランとの関連

【指針Ⅰ：教育】1-(3)-1 接遇マナー講座とワークルール講座を実施し、実践的な社会力を身につけた。

【指針Ⅱ：学生支援】1-(1)-① 就職先訪問を継続して実施した。その際に得た情報を就職指導に生かしていくことが必要である。

【指針Ⅱ：学生支援】1-(3)-① 公務員試験指導を充実させ、面接・作文など集団での指導を強化した。

富山短期大学幼児教育学科5年間の就職状況

卒業年度		平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
就職希望者／卒業生		90 / 92	84 / 87	85 / 88	83 / 83	104 / 106
専 門 職	幼稚園	15	8	12	4	6
	保育所	67	74	67	56	64
	幼保連携型認定こども園				20	19
	福祉施設等	5	2	4	2	9
	小計	87	84	83	82	98
	専門職就職率	96.7%	100%	96.5%	99%	92.5%
	専門職関連	2	0	0	0	0
一般職	1	0	3	1	5	
進学	0	1	1	0	1	
家事	2	2	1	0	2	
総計	92	87	88	83	106	

Ⅲ-1 ボランティア・地域活動

担当 [山川]

1. 現状

(1) ボランティア手帳における幼児教育学科学生参加状況

ボランティア参加数

2017.2/28 現在 () は平成 27 年度数

学年	全学生数	参加率	参加人数	延人数	レポート数
1 年	88 (108)	69.3% (60.2)	61 (65)	95 (97)	1.6 (1.5)
2 年	106 (83)	14.2% (53.0)	15 (44)	26 (68)	1.7 (1.5)
全学科学生	708 (692)	46.6% (47.7)	302 (325)	660 (656)	2.2 (2.0)

月別参加人数

2017.2/28 現在

学年	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月
1 年	0	0	0	35	2	24	31	2	0	1	0
2 年	4	0	0	2	10	0	4	0	4	0	2
計	4	0	0	37	12	24	35	2	4	1	2

今年度も、例年通り、7月から10月にかけて行われる、付属みどり野幼稚園主催の行事への1年生の参加者が多い。

また、今年度は、全学のボランティア活動賞へ、1年生2名を推薦した。2年生には該当者はいなかった。

(2) イベント参加

学科に直接依頼されたり、授業担当教員から申し出ることによって、様々な活動に多数の学生が参加した。

- ・8月 第31回ふなはしまつり出演（手遊び、歌あそび等） 中新川郡舟橋村
- ・9月 絵本ランド出演（遊びうた、読み聞かせなど） ファボーレ富山店
- ・9月 とやまっ子みらいフェスタ運営補助（受付、着ぐるみなど） 南砺市福野体育館
- ・12月 NPO 法人青少年育成ネットワーク・ウイング 家庭の日 クリスマスイベント とやま劇場
- ・2月 うれしい1年生のつどい出演（オペレッタ） 高岡市民会館
- ・3月 新入園児のつどい出演（手遊び、遊びうた等） 富山県民会館

2. 課題

(1) 活動参加推進

本学では、特別に学科に対してボランティアの参加依頼が来る場合以外は、「Web ボランティア手帳」でボランティアの募集が行われている。しかし、本学科の学生については、ボランティアへの参加意欲があり、「Web ボランティア手帳」でボランティアを探そうとしても、ログインするところから躓き、結局ボランティアへの参加ができなかった、という声がある。

しばしば聞かれる。これについては、入学時にそのシステムや利用方法などを説明しているが、その際のオリエンテーションの説明では理解できていない学生も多いことがうかがわれる。学生部と連携しながら、学科であえて時間をとり、手続きの確認や学びと関係がある活動をピックアップし、紹介して参加意欲を喚起することが必要であろう。

(2) 地域活動の充実と拡大

授業の一環として、教員も関わり、地域に働きかける自主的な活動に取り組むことで、学生は日ごろの学びを活かし、地域活動に参加することが可能になっている。このような取り組みを重ねることで、学生の地域活動が充実し、広がり、学生自らが積極的に取り組む姿勢が作られることが期待される。

3. アクションプランとの関連

【指針 3：地域貢献】1- (2) -② ボランティア手帳のシステムのオリエンテーションを改善

学務課へ申し入れをし、オリエンテーションの方法を改善したが、あまり効果は得られなかった。

Ⅲ-2 幼児教育センター活動

担当 [宮田・梅本・山川・大森]

1. 現状

(1) 研究及び広報部門

①第44回幼児教育研究会の開催

日時：平成28年6月11日(土) 9:30-15:30

共催：富山国際大学(子ども育成学部)

主題：新しい時代の“保育の質”を考える

講演

大宮勇雄(福島大学)

「主体的な学びとは何か

～『要領・指針』改訂を前に『教育』について考える～

シンポジウム

「保育実践を基礎とした保育の質向上の取組み」

シンポジスト 長戸英明

大宮勇雄

宮田 徹

コーディネーター 梅本 恵

幼稚園公開保育

附属みどり野幼稚園

「子どもにとっての遊びとは」

参加者：245名(内訳：一般146名、招待者8名、本学科学生81名、教職員10名)

②機関誌「越の子」の発行

No.72号 2016.5.25発行(A4版 6ページ) 1,100部

[内容] 私の教育研究歴(高木三郎 大森宏一)、

退任にあたって(飯田 聰 橋本麻里)他

No.73号 2016.10.1発行(A4版 20ページ) 1,300部

[内容] 第44回幼児教育研究会記録集

(2) 研究活動の把握と資料収集部門

幼児教育センターの予算で購入した図書資料及び設置場所は次のとおりである。

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| ①日本保育学会論文集(E-206 学科事務室) | ②美育文化ポケット(5階ラウンジ) |
| ③チャイルドヘルス(5階ラウンジ) | ④プリプリ(5階ラウンジ) |
| ⑤あそびと環境0・1・2歳(5階ラウンジ) | ⑥新幼児と保育(5階ラウンジ) |

(3) 保育実践助言指導部門

県・市、県・市保育士会等関係団体、保育所等での研修会・公開保育・実践研究等における研修講師、助言指導等については、以下のとおりである。

(「Ⅲ-3 研究・社会的活動・所属団体研修等」の項目を再掲)

(石動瑞代教授)	
朝日町保育士会保育研究会助言者(県保育士会委託研究)	平成26年度～
射水市保育士会保育研究会助言者(県保育士会委託研究)	平成27年度～
黒部市保育士会保育研究会助言者(県保育士会委託研究)	平成28年度～
射水おおぞら保育園園内研修講師	平成23年度～
射水市保育士会総会講演	平成28年5月
射水市保育部会事例検討会、部会長勉強会助言者	6月・7月・11月
中堅保育士研究会講師(福祉カレッジ)	平成28年7月
富山市立幼稚園協会園長研修会講師	平成28年8月
富山市保育連盟保育研究部会8「子ども理解」講師	平成28年10月
南砺市保育士会研修会講師	平成28年10月
富山県保育研究大会第2分科会助言者	平成28年11月
朝日町保育士会全体研修会講師	7月・11月
(難波純子准教授)	
海老江保育園園内研修会講師(毎月1回)	平成28年5月～平成29年3月
射水市保育研究部会 講師	平成28年6月～11月(計6回)
(山川賀世子准教授)	
富山県保育士会(南砺市) 研究助言者	平成28年度
射水市大島つばさ保育園 園内研修 講師	平成28年度
(梅本恵准教授)	
新湊中部保育園園内研修会講師	毎月
若葉保育園園内研修会講師	毎月
黒部市保育士会委託研究講師	平成28年7月～
小矢部市保育士会公開保育講師	平成28年7月、11月計3回
小矢部市保育士会第54回総会講演講師	平成28年5月
高岡市 園長研修会講師	平成28年7月
射水市保育士会保育研究部会講師	平成28年6月、11月計5回
富山市保育連盟保育研究部会講師	平成28年9月
幼保連携型認定こども園吉島保育園講演会講師	平成28年12月
南砺市保育士会研究部会講師	平成28年12月

2. 課題

平成28年度第44回以降の幼児教育研究会のテーマ及び内容については、子ども・子育て支援新制度の実施、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂など、保育をめぐる状況が急激に変化する中、時機に即応したものとするのが求められる。平成28年度は、参加者アンケート調査に基づき現代的な課題を設定し、内容構成についても、部門別研修の形式をとらず、午前は幼稚園公開保育、午後は講演及びシンポジウムとした。平成29年度は幼児教育学科開設50周年記念としての研究会や機関誌の企画とする必要がある。

今後とも、地域課題と密接につながった研究や社会貢献の取組をより一層充実させることが必要である。

3. アクションプランとの関連

【指針3：地域貢献】2-(6)-③幼児教育研究会のテーマ・内容を検討

(【指針1：教育】3-(9)-①再掲)

「2. 課題」に述べたとおり、当面は、その時々現代的な課題を幼児教育研究会のテーマとして設定することとした。また、平成29年度は、学科開設50周年記念として、学外会場で開催することとした。